

そっ たく

啐啄

令和8年3月1日刊行 No.26
編集・発行 大島町教育委員会
教育文化課事務局
Tel.04992-2-1453
題字「井島 吉春」

忘れられるもの、本質を大切にしていけるもの

教育長 吉澤 淳

「丙午・ひのえうま」の年となりました。「午年」ということで新年から「馬の絵」を見ています。昨年、大河ドラマで取り上げられたのを期に浮世絵が再び世の中の注目を集めています。ドラマには登場しなかったものの、代表的な浮世絵師、歌川広重の「馬の絵」を鑑賞しています。安政の大地震の後、甚大な被害を受けた江戸の町を多数、描いたものの内の一枚です。場所は「四谷内藤新宿」。地震の復興がどれほど進んでいたのかは謎の部分がありますが、路面には馬の糞まで描かれていて、人々の暮らしはのどかに見えます。注目したのは馬の脚元。どの馬も四本の脚にわらじを履いています。どの馬も四本の脚にわらじを履いています。蹄（ひづめ）は馬にとって第二の心臓と言われる大切な部分ですから、その保護のためにわらじを履かせたものだそうですが、わらじが馬の体重を支えることは大変なことで、替えのわらじを何足も持ち歩かなくては仕事にならなかったと伝えられています。刊行は江戸の最末期、1857（安政4）年。169年前の作品です。直後の明治期に入って、抜群の性能を持つ蹄鉄が輸入され、国内での生産が広がりました。馬とわらじの結びつきは浮世絵の中にだけ閉じ込められ、やがて人々の記憶から忘れられていきました。

時が進み、現代です。身の回りの全ての物が利便性を圧倒的に高め、グローバル化を果たしています。人対人の意思の疎通の在り方も一変しました。生まれたときからPCやスマホに囲まれている子供たちにとっては、その変化自体が昔すぎて未知の世界の話となっているのかもしれませんが。私など昭和の人間は、ワープロが現われた時に衝撃を受け、「一太郎」、「花子」、「ワード」、「エクセル」…と、その機能を追いかけて奮闘したものです。ワープロからPCに進化する過程で、私たちの文章作成の方法もPCの中で文章を構想、記述、推敲、完成するものへと変化し、用紙に手書きする機会は、簡単なメモを書くことを除いてほとんどなくなってしまいました。プロの物書きも原稿用紙に向かう人の割合は低くなっていると聞きます。PCは即座に漢字変換をしてくれるし、データの保存も簡単で永久的です。メールで使用する文言となれば、実に簡略化されたもので、絵文字で感情を表す等、多様性はあるものの正確な文章表現とは異なるものであると言わねばなりません。一方、生成AIは、私たちの意図する内容をほぼ正確に文章化してくれますが、一人ひとりの個性が埋没してしまうのではないかとこの恐れすら感じます。

このような状況の中で、作品集「めっかり・第62号」が刊行されます。大島町立小・中学校の子供たちの作品集です。大島町史・通史編を紐解くと、創刊は1963（昭和38）年、大島教育研究会の国語部会を中心に成されています。63年前のことです。創刊号のあとがきには、「とにかく大島の子供たちの文詩集がはじめて誕生したことはうれしいことだ。これは三原山の山麓から生まれ、磯の海鳴りの中から生まれた子供たちの生活のことばである…このめっかり一号を読み学んだ子供たちが書く意欲をわきたたせ、良い作品をどしどしこの文集に寄せ、さらに内容あるものに盛り立てていくことを願ってやまない。われわれもまた豊かなものの感じ方、厳しいものの

考え方を子供たちに指導しながらこの文集をふくらませ、成長させるよう努力したいものである」と記され、先人のほとぼしる情熱を今に伝えています。「めっかり」を創刊した先人の言う「生活のことば」とは何なのかを突き詰めなくてはなりません。文章作成ツールの利便性はさらに高まっていくことでしょう。しかし重要なことは、「めっかり」創刊者の指導理念である「豊かなものの感じ方」、「厳しいものの考え方」を確実に培っていくことです。子供たちを取り巻く言語環境を大切に守り、大切に育てていくことが変わることのない指導の本質です。



まだ見ぬ世界 国宝より

教育長職務代理 山田三正

映画『国宝』。芸の道と人間関係の描写でした。その中で語られた、「まだ見ぬ世界」という言葉が、私の心に深く残っています。芸の道。基礎・基本を確実にし、芸に秀でる。道を極めたその先にまだ見たことのない世界をみたい。今この瞬間、目の前に広がる世界の後、これから自分が歩む道の先で、人と出会い景色を造る。

それは自分が造るものである。

島の宝・若者の二十歳の祝いの場がありました。家庭で仲間とともに大島で、そして今の生活の場で育った、輝く姿を見せてくれました。夢に向かって、目標に向かって、明日に向かって努力している人、すでに自分の道を歩み始めている人。そしてまだ道が見えず探している人もいました。その姿に大きな希望を見ました。改めて「明日」は誰にとっても「まだ見ぬ世界」なのだ、今の自分をしっかり見つめ、明日の自分を造って欲しい。そして明日も輝いて欲しいと思いました。

今年の箱根駅伝では20の大学と学連選抜の選手210名が走りました。青山学院大学が掲げた「輝き大作戦」のスローガンも、まさに“輝く自分”を目指す挑戦の象徴でした。監督は「一人ひとりが一番星となって輝いて大手町に帰ってきてほしい」と語りました。部員は自分の役割を果たし、仲間と支え合いながら、それぞれが自分の輝きを追い求めて努力を重ね、その中から選手として走ったと思います。結果として、誰もが主役となり、チーム全体が大きな成果を手に入れました。選手たちは、仲間や監督という環境に支えられながら、自分自身の成長や達成感を実感し、それぞれの輝きを見つけてきたのではと思います。

大手町のゴール。優勝のテープを切るのも、シード圏外のゴールでもそこに立って見える世界がある。見たことのない世界 挑戦したからこそ見える世界がある。大切なのは、その場に立ち結果や他人が認める輝きだけでなく、新しい世界が見えた、自分自身が輝いていると感じられる瞬間を大切にしてほしいと思います。そして、その先にまた一歩ずつ進んでほしいと思いました。

大島で、大人への階段を歩いている島の宝である子ども達。それぞれの発達段階で、得意なこと、苦手なこと、好きなこと、悩んでいることがあると思います。それと向き合っていくことが未来の自分を造る大切な要素となります。見えない未来を思い描くときは不安も伴うと思います。今を生きる力。新しい挑戦に臆せず、自分らしく歩める力。悩みや不安を抱えたとき、一緒に考え寄り添いながら進む力。新しい自分に出会える力が育つ大島っていいですね。



追憶

委員 井島吉春

3月は卒業式シーズンで各校では厳かに式が催される。流れはだいたい同じだが、それでも学校ごとに違いのある式典となる。

卒業生にとっては先生方と長い時間を過ごし、怒られたこと、褒められたこと、辛かったこと、楽しかったことなど色々な思い出が去来し、その思い出は時間が経つにつれて自分自身の心の糧となる。いい思い出も悪い思い出も全て懐かしい宝物である。担任、部活の顧問の先生などはすぐに頭に浮かび、一生涯忘れることのない存在だ。

私はその昔（約50年前）五中の生徒であった。古い木造校舎で、毎日朝と午後部活に行く前にぞうきんがけをしてピカピカにしていた。ぞうきんがけをやらないズルい生徒もいたが、まあ、しょうがないなと思いつつ3年間やりぬいた。野球部に所属していたので毎日今では考えられない様な理不尽なシゴキがあった。今、たまに当時の後輩に会うと必ず野球部時代の話になり、水は飲むな、途中で休むな、怪我をするのは練習不足だなど、殴られ蹴られ根性論一辺倒の無茶苦茶な指導で大変だったよなあと話が止まらない。昔は仕方がないでは済まされない悲史である。暴力は昔も今も未来も絶対にゆるされない愚行なのだ。

そんな中学時代だったが今でも会いたいと思う先生がいる。内地から赴任してきたA教頭先生である。この先生の専門は理科だというのが、字がものすごくうまく、どこかの書道団体にも属されて活躍されていた方で、書写の時間はA教頭先生が教えてくれた。たくさんの種類の筆や専門誌も見せてくれて、外見も内面もとても温厚な先生で私にとって一番好きな先生だった。

中体連都大会遠征で一回戦で負けて帰島した時も「先生、負けてしまいました」と言ったら「いいんだよ、よくやった」と言葉は少ないが、その先生の存在が何よりの救いとなった。色々な出来事のあった中学時代だったが、A教頭先生から何かと声をかけていただきありがたかった。そうこうしている内に卒業の年になったが、私は五中の卒業式に出席していない。中三の時、先代住職（祖父）が他界し、急遽得度（仏門に入ること）し、仏教系の高校に行かなければならなくなってしまった。卒業式は3月だが、3月中に修行寺へ入り作法を習得し、4月からは修行しながら高校へ通うことになったのだ。

A教頭先生が色々心配してくれて私立の学校だから面接があるのでその練習をしようと何回か指導してくれた。その学校の過去問も取り寄せてくれて（国、数、英）それぞれの教科の先生から個別に指導もして頂いた。卒業式は出られないので朝礼の時1人だけ卒業証書授与式を行なって頂き、この時の卒業証書もA教頭先生が書いてくださったもので今でも大切にしまっている。

多くの先生方に助けられ、高校入学、卒業となり、大学へ入学した。下宿先は世田谷区の桜新町というサザエさん通りがある所だった。毎朝地下鉄新玉川線（現在の田園都市線）に乗り通学するが何しろ朝のラッシュがすごかった。今から40年以上前のことで学生の数も多く、毎朝ごった返して大学に通った。ある朝その人混みの中でA先生を見つけた。「A先生！」と人の波を掻き分け近づくと「おお、吉春君、元気か、人のうわさで大学に入ったと聞いたがどうしてる？」と近況を聞いてくれたので「はい先生、桜新町に下宿しながら仏教学部に通っています」というと、「何、下宿か、金がかかるじゃないか、大丈夫か？」とすぐに家計のことを心配してくれた。私は「はい、バイトしながら何とかやっています」というと「何か困ったことがあったら連絡しなさい」と名刺をくれた。そこには品川の中学の校長と書かれており、自宅の住所（等々力）や電話番号も書かれていた。

卒業後まで色々と心配してくださり A 先生には感謝の念に堪えない。大島に帰ってきていつの日か A 先生にお会いしたいと思っていたが、いつの間にかその機を逸してしまった。私にとって A 先生の存在は大きな心の支えであった。会いたい先生がいたら会える時に会った方が良く、お互い歳をとるのだから。



箱根駅伝

委員 山本 忠夫

毎年の恒例行事なのですが、今年もお正月の箱根駅伝を楽しみにしていました。今年の優勝は大会新記録をもってダントツで青山学院大。2度目の3連覇ということ。いや、強いなあ、と思いました。箱根駅伝に出る大学の選手たちは普通の人から見たらみんながバケモノのような速さ。その中でも、さらにバケモノのような選手がいる。その一人が、青学の山登り5区の選手でした。今までも「山の神」と称されこの記録はもう抜けないんじゃないか、みたいな先輩選手がいた中で、さらに区間最高記録。みんな信じられないような目で見ていましたね。アッパレです。

その中で、その選手が、相手大学の監督が乗っている車を追い越す際にガッツポーズをするということに賛否が分かれる話題になりました。相手を尊重するという「スポーツマンシップ」から見たら、確かにトップ選手がする行為としては褒められるものではないですが、ゾーンに入った選手が「無意識」にそうやってしまうことはあるような気がして、それを大人が揃って「けしからん」とするのはちょっと可哀そうかな、と思ってしまいました。

青学って何となく華やかだし、監督さんも派手な感じだから、どんなチーム育成方針なのかな？と興味があったのでちょっと調べてみました。監督の言葉に「陸上2割。8割は哲学的なところから教育していく。教育では勝った負けたではありません。箱根駅伝を通じて社会に役立つ人材を育成するのが、私の教育理念です」とありました。厳しい練習だけでなく、このような理念はチームとして強くなるためにはどうしても必要であろうな、と思いました。それは、特に才能がずば抜けている子は、凡人には分からない変わったところがあるから（言い過ぎたらごめんなさい）。自由にさせたらみんな気分で行動するから真に強くなるのは難しい。だから、「君たちはどう生きるか」（吉野源三郎著）のような哲学的な教育が必要なのだと思います。

余談ですが、青学に関しては寮の門限は22時、これは絶対厳守。破ることは許されない。そして消灯時間も決まっている。そして毎朝5時起床、その後朝練として集団走があるそうです。

大学生になっても規律が厳しく勉学だって疎かにしない。大学生なのだから、自由に生きたいという気持ちもあるでしょう。それでもそこに師匠の理念があり、学生がそれを「夢のため」と納得し、仲間同士競争し、自ら規律正しい生活をしている。それでも箱根駅伝の選手になれる保証はない。大舞台での華やかさの裏ではやはりもがき苦しんでいる。学生として毎日鍛錬をしていることをしっかりと認識し応援してあげたいなと思っています。



「それぞれの行動と言動」

委員 秋田 幸重

某市中学校生徒によるいじめが SNS やニュースで取り沙汰されています。いじめは、子どもたちの心に深い傷を残してしまうととてもつらい出来事です。学校は本来、安心して学び、友だちと笑い合える場所であるべきなのに、そこで苦しい思いをしてしまう子がいるという現実には私自身胸が痛みます。教育現場に必要なのは、子どもたちが「お互いを大切に作る気持ち」を自然に育てられる環境づくりだと考えています。たとえば、相手の話を最後まで聞くことや、自分の気持ちを言葉にして伝える練習をすることなどの日常の小さな積み重ねが思いやりの心につながっていきます。誰かを傷つける言葉や行動が、どれほど相手の心を揺らしてしまうのかを知ることが、いじめを遠ざける大きな力になります。

また、子どもたちのそばにいる大人の姿勢もとても大切です。大人が優しい言葉を使い、困っている人にそっと手を差し伸べる姿を見せることで、子どもたちは「こうやって人と関わればいいのだ」と自然に学んでいきます。教育は教室の中だけで行われるものではなく、日々の生活の中で大人が示す態度そのものが、子どもたちの心に影響を与えているのです。さらに、いじめに悩む子が安心して声をあげられる場所があることも欠かせません。先生やカウンセラー、信頼できる大人など、話を聞いてくれる人がいるだけで、子どもは「ひとりじゃない」と感じることができます。たとえ小さな不安でも、気軽に相談できる雰囲気があれば、つらさを抱え込まずに済みます。いじめを完全になくすことは簡単ではありませんが、教育には子どもたちの未来を明るくする力があります。お互いを思いやり、安心して過ごせる学校をつくるために、大人も子どもも一緒に歩いていくことが大切だと考えています。



【大島町教育相談室のご案内】

大島町教育相談室は、教育相談員・指導員・社会福祉総合相談担当の5名体制で、子ども達や保護者、教職員のための相談対応、支援を行っています。

教育相談事業

不登校・いじめ・発達の遅れ・学業不振・非行など、子ども（小・中学生）のあらゆる教育相談について、本人や保護者及び学校関係者のご相談をお受けします。



困ったり、悩んでしまった時は、迷わず（2-4544へ）直通電話へ連絡ください

【連絡先】大島町元町字丸塚 548 番 1 大島町生涯学習センター・郷内（2階）

電話：2-4544

メールアドレス：kyouikusoudan@citrus.ocn.ne.jp

※なお、来室される方は、教育相談員が学校訪問するなど不在の場合がありますので、事前にお電話にて確認のうえお出掛け下さい。

【パレット（適応指導教室）のご案内】

様々な理由により、学校に行きにくくなったり、教室に入れなくなったりして、登校できないでいる小・中学生のための居場所です。

一人ひとりに応じた体験活動や学習活動、小集団での活動を通じて、自主性・社会性を育みながら、学校生活への復帰や自分らしい進路の実現に向けて気持ちを整えていくための支援をしています。

「誰かに話してみたいな」「勉強も不安だな」など、困ったときはいつでも連絡してみてください。

【パレットの一日の活動内容】

9:30～ マイプラン（今日の予定）の記入

10:00～ 集中タイム

学習に取り組めます。

12:00～ 昼食（お弁当を持参ください）

13:00～ フリータイム

おしゃべり、スポーツタイム

14:15～ 振り返り マイプランの記入

ものづくり、カードゲームなど

～14:30 閉室

- ・月曜日から金曜日の9時30分から14時30分です。
- ・休業日や休日は、町立小中学校と同じになります。
- ・通室する曜日や時間は、お子さんや保護者と相談して決めていきます。
- ・活動内容については、学年等も考慮し、一緒に考えていきます。 連絡先 Tel 2-4544

教育委員会カレンダー

月	日	内 容	場 所
3	19	中学校卒業式	一中、二中、三中
3	24	小学校卒業式	つばき小、さくら小、つつじ小
4	6	中学校入学式	一中、二中、三中
4	7	小学校入学式	つばき小、さくら小、つつじ小
5	上旬	バレーボール大会（中学生の部）	未定
5	上旬	野球大会（中学生の部）	未定
5	中旬	バレーボール大会（婦人の部）	未定
5	下旬	ゲートボール大会	伊豆大島ゲートボール場

※啐啄（そったく）とは

鳥の卵が孵化しようとするとき、殻の中で雛鳥が外に出ようとして内からコツコツと殻をたたき音を「啐」といい、母鳥がその孵化の瞬間を悟り、殻の外をコツコツ突き破ることを「啄」といいます。この啐と啄の呼吸が合うとうまく殻が割れ、丈夫な雛が誕生しますが、どちらか早すぎても遅すぎてもよい雛は生まれません。教育も教わる側の生徒と教える側の先生が、啐・啄同時で、あることが理想であり、依って大島町教育委員会便りを『啐啄』と名付けました